

2013年9月9日
2013年9月18日
2013年9月25日

「私と英語」

研究論文レベルのものは、書けませんと言ったら、「時系列的に過去の出来事を書き連ねていけば、立派なものになる」と先生に言われて、ああ、そうか、過去の事実を書き連ねるのは、そう困難なことではない、と。

最初に読んだのは寺田先生の「私と英語」で、その中に SIM の記述があって、ああ、同じような軌跡なんだ、となんか安心感が出てきて、ここで「先生、研究員志望ではないが、一度我が人生の総括という意味で、書いてみようか」と言ったのが運の尽き。「是非、書いてみて」と励ましやら、プレッシャーやら分からないままに、「書いてみようか」と思いながら決心がつかない。前々から、なんでこれほど長期に渡って「記号研」に関わって居るのか、自分でも不思議だったが、先日、寺島 美紀子先生の「英語と私」を読んで、ああ、このことだったのか、と得心がいった。

それは美紀子先生の論文中に、こんな一節があった。

A4用紙の18ページ目、「ともかく記号づけを知ってからは、(略)「難しいから分からない」という英文を見せられても、記号づけしながらその場で読んで説明してあげるとびっくりするというような場面を何度も経験した。(略)どんな複雑な文でも、ほとんど相手が納得するような構造分析が可能なのだった。」

⇒教師が教師に質問するという場面は、なかなか学校現場では見られない。切磋琢磨という概念がそもそもない。それで英語科主任の頃に、「若手の先生にこっちから質問をしてみよう」と思い立って、「先生、さっき授業から帰られたようだけど、今日説明した英文をメモ用紙に書いてみて」と持ちかけた。啞然としたが、誰一人、さっきまで授業で説明していた英文を再現できる先生はいなかった。実はこれは予測可能な場面だった。なぜなら私自身が、記号づけを知る前の実態だったからだ。教室から帰って、その日の「授業ノート」を書く習慣があって、毎回、テキストを見ながら、講義した英文を書き写しながら講義

の内容を書いていた。それが記号の勉強を始めてから、或る日、テキストを見ないでスラスラと英文を再現していたのではないか、あの時の驚きは今でも忘れられない。

そういえば或る日生徒から「先生は、教科書の英文を板書するときに、テキストを見ませんね、他の先生はテキストを見ながらいつも書き写しているのに」と。気にも止めなかったが、その日に授業する英文を、記号づけして読んだ後だったので、構造分析を終って、完全に英文が自分のものになっていたんだ、という事に気がついた。複文を連結詞で単文に分解した時点で内容は既に頭にインプットされていたんだ、ということに気がついた。文章は、ほぼ矛盾のないように、論理的に流れていく。高校生対象の英文の中身なんて、そう深い、哲学的な内容を含んでいないこともない。構造分析をしっかりとやっておけば、暗記しようと思わなくて、自然に頭の中に残っているという事実気がついた。

寺島美紀子先生からメールで送られてきた論文をプリントアウトして、丁寧に読んでいて、ああ自分が言いたかったことを見事に代弁してくれている、さすがだ、と感心して、某日、寺島先生に電話をして、美紀子論文の感想を述べた。その時に再度、「先生も書いてご覧よ」と言われて、それがまた大きなプレッシャーになったが、書いてみようという気持ちは残っていた。

再々度、美紀子論文を読み返してみた。A4で31ページだから、1ページで400字詰原稿用紙4枚分あるので、都合原稿用紙124枚分になる。これを一気に書き上げる力量にも肝を潰す思いだ。

再度先生に電話して、こんな感じで書いています、と。ああ、それでいいんじゃないか、と激励を頂いて、よし、この調子で書き抜いてみよう、と再度心が決まった。

さて、前の話に戻るが、先生たちが、今さっき授業した英文を再現できない中で、自分はスラスラと再現できるのは、何故か？この時に、「寺島記号式」のすごさを知った思いだった。それからである、授業が心楽しく、軽いものになってきた。もともとが研究者タイプではなく、サーフィンタイプで調子の波にのるのが得意な体質で、調子に乗って授業を乗りこなしてきた。

そして、或る日、愛妻を亡くすという悲劇に見舞われた。授業展開に、喜びと、快感を感じていた日々、家内は闘病生活を。そして運命の日がやってきた。

当時、勤務校で、そこは商業科しかない私立・女子校だったが、時代の波というか、「普通科」を創設して、生徒募集の新しい局面を迎えていた。普通科新設の「準備委員長」の指名があっていたので、家庭の事情を理由にはできず、まさに東奔西走の日々だった。なにしろ歴史のある学校だけど、商業科1本でやってきた学校なので、普通科のカリキュラム一つ組めない教師陣だった。当時、ちょうどタイミングを合わせるかのように、博多駅前に、「代々木ゼミナール」が開校した、あらゆる伝手を頼って、なんとか「代々木ゼミナール提携校」を売りにしようと、いろいろと知恵を絞った。幸か不幸か、代々木ゼミナールも、地元博多の学校評判に疎く、提携の話がスムーズに進んでいった。進学実績のない「普通科新設」の実業高校との提携に、今思えば、よくぞ決断してくれたものだ、と。3年先の生徒募集を見越しての英断だったのだろうか。提携の話と同時進行で、普通科の「カリキュラム作成」作業に入った状態で、1年後の新出発に備えた。この当時、普通科長の責にあった私が、目標とする「九州大学」の入試問題を半分も解けないという、厳しい現実があった。普通科の新設という大仕事と同時に、私自身の「英語力」の問題が、これは誰にも分からないだけに、自分ひとりで解決しなければならない大問題だった。

商業科の生徒相手に、実業高校相手レベルの教科書の解説で、授業をやりくっていた時と違って普通科では、入試模擬試験問題の解説やら、大学の過年度問題の回答等、難問山積だった。日頃から入試問題に接していれば、それなりに対応できただろうが、何しろ20年近く、入試問題なんか見たこともないから、新コース開設の準備よりも、自分自身の英語力のアップこそが焦眉の急で、あの当時のことを思うと、今でも胃が痛む感じですね。

毎晩10時前に学校を出たことがなく、同僚を送り出して、あとは「自分の勉強」で、このことは誰にも言えず、大変苦しみました。

それまでにも、私自身は「英語の授業」への関心は高く、いろんな授業法にトライしてきたのは事実です。最初に私費で神戸の講習会に参加したのは「GDM」の研修会です。基本語500語で、いわゆるベーシックイングリッシュですが、研究社の月刊誌に「入門期の英語指導法」の研修会の広告が掲載されていました。英語の出来ない生徒相手の日々の苦闘中でしたから、そうだ、高校生と思うから、出来ないことに腹立ちを覚えるのだから、うちの高校に入ってく英語を初めて学ぶ>生徒と仮定してみよう、それなら英語が出来なくても当然だ、と。実際問題、びっくりされるでしょうが、昭和40年代入学してくる生徒は、

アルファベットが満足に書けない生徒がクラスに3分の1はいたのです。(中学3年間はなにをしていたのか)当時のクラスは、私立高校で生徒急増期を迎えて、最大一クラス65名という現状でした。机間巡視ができるスペースがなくて、机の上を鷓越えよろしく、後ろまで、今では信じられない現状があったのです。

神戸の研修会で忘れられない思い出があるのです。山の中腹に大きな池のあるところでしたが、その池のそばを、Colaを片手に、研修所の玄関にむけて歩いていました。ちょうどその時に、小さなボートに数名の小学生が乗って、横を通りかかったのです。ボートの小学生と目が合った時です。「You will give it to me」と大声で叫ぶのです。私の手にあったColaを指さして。一瞬何を言っているのかわかりませんでした。2回目に叫ばれて、慌てて「オーノー」と。小学生が、英語で、コーラを寄こせ、と。実に衝撃的な出来事でした。3泊4日での研修は、まさに目から鱗の体験でした、English through Pictures というイギリスの本をテキストで使用するのですが、なんと2時間目には、過去形も未来形も学んでしまうのです。日本の中学では、過去形が出て来るのは、中学2年からですね。中学1年で、大半の日本人は英語を習い始めますが、1年間は「現在形」だけで、一した、という表現は学習しません。実際に、日本語で語る話題は、昨日のあのテレビ、面白かった、昨日食べたリンゴは美味しかった、昨日はどこそこに行ったよ、と過去の話題ばかりです。英語を習い始めて、興味津々だった軽やかな気持ちは、昨日のことが言えない英語表現、それで興味がじょじょに失われてくるのです。

Last night we watched TV' drama.

It was very interesting.

子どもたちのお話の大半を占める「昨日の話題」が英語では語れないのです。

GDMは、違いました。テキストの2時間目に、その「過去形」が出て来るのです。これには正直驚きましたね。実際に教壇で教師が身振り手振りでやるのです。そのシーンを再現して見ましょう。

教卓に一冊の本がおいてあります。教師は A book is on the table. と発話します、生徒がそれに続いて同じように、1冊の本がテーブルにある、という状態です、それから、その本を30センチほど横にずらして 再度 A book is on the table.

と発話します。場所が違っただけで、表現は同じです。そして、次に元あった場所を指し示して It was on the table. と何回か繰り返します。今ある場所をさして、is の表現が、元あった場所を指す時は、was に変化しているのです。今はここだけど、さっきはあそこにあったんだ、という状態です。続いて I am here, 横に移動して I was there. こうして何回か繰り返して、今と「さっき(過去)」の表現の違いを説明していくのです。これには私自身、びっくりしましたね。過去形は語形変化等があるので、1年間じっくり英語に慣れてから、という中学校英語の方針を根本からひっくり返す発想でした。

お恥ずかしい話ですが、私はその研修会で初めて it の意味が理解できました。まず自分を指さして I, 目の前の相手をさして You の発話訓練をしてから、第三者の女性をさして she 男性をさして he (女子校ですから男役を決めて)、そして「物」を指さして It と発話するのです。ここで初めて it はものをさす言葉だと。

机の上に、教科書やらノートや鉛筆をおいて、一つずつ指さして 生徒に it を言わせます。その後、一人の生徒を教卓の前に立たせて、it を手にとって、と指示します。生徒はちょっと迷いますが、適当に取ってくれます、ああ、残念、それじゃないの、こっちだよ、と。これで生徒は完全に迷ってしまいます。これをとれば、あっち、あっちをとれば、こっち、そこで、おもむろに、ノートを取って、すかざす It is a notebook. 物には、名前があることをそのために日常生活がうまく回転していくんだよ、と。日本語では「教科書」というけれど英語では「textbook」という名前が付いているんだよ、と。必然的に英語を学ぶということは、それぞれの名前も覚えないとね、と。

東京教育大学(たしか)の吉沢 美穂先生や片桐 ユズル先生と言う名前だけは記憶していますが。当時の錚々たる大学の先生方が、指導者としていましたね。English through Pictures を使った授業は、高校で英語を教えている私にとっても、画期的な出来事でした。

このことが契機になって、学校に帰ってからは、しばらくこのテキストをプリントして教えました。人称代名詞を教えると、My father is ……という英文があつて、次に my Father が He に変わっても、彼はという訳語を当てる生徒は激減しました。父は。。という具合になっているのです。こんな例がありました。My boyfriend is in my class

He is ときて、なんと「彼氏は」という訳語をあてたのです。驚きでした。He は彼で、she 彼女と覚えこんでいた訳語が「ボーイフレンドは、今で言う、彼氏じゃん」って感じで。日本語の訳語を通さなくて、英語を英語で理解させる、そこに GDM direct method の意味があるのですが、2時間目に、過去形、3、4時間目に、未来形、進行形と自然に進んで行くのです。勿論「文法用語」は出てきません。その場の状況をしっかり目で確認して、動作の表現を覚えて行く過程で、文法用語は不要です。

これは、記号研でも同じですね。センマルセンで構造分析していけば、文法用語の入り込む隙はありません。あの文法用語って、英文の構造の説明するのに容易にするための「教師のため」ではないかと、記号研で学び、初めてそんな感じが。それでしっかり生徒に「文法用語」を教えこんで、英語力とは関係ない、そんな実感を持ちましたね。この教師の便宜のために、生徒は無駄な労力を、それがあたかも「英語力」であるかのように、そんな感じを持っています。

しかし、学校の正規の授業は指定の教科書があります。学期始めにシラバスの提出もあって、実際身動きがとれません、共通の定期試験があって「評価」の問題がありますから。それではどうするか？ところが生徒に興味・関心が増してくると、授業に熱気が漂います。学年共通の試験範囲をさっさと済ませて、「今回の中間試験範囲はここまで」と宣言、GDM 方式で教える時間を確保しました。試験には関係なくとも、生徒の興味はつもるばかりです。「静かにしろ！」と叫ばなくていい授業の醍醐味を味わいました。お互いに指を指しながら、英語を発話していく授業中は、騒々しいのですが、中身があります。自分は英語が口に自信をもって、出せている、そんな輝きがありましたね。

GDM の話を続けます。当時、アルファベットもしっかり書けない生徒にも、GDM 方式の授業は大変好評でしたが、いかんせん、中学校で3年間、英語の洗礼を受けています。それだけに理解も早かったのですが、実際問題「本当に初めて英語に接する」生徒に教えてみたいという欲望が膨れ上がりました。

当時の私立高校は、すべてそうとはいませんが、教員給与が結構世間と較べて、低かったのです。昭和42年の私の初任給は22,600円でした。忘れもしません。全日空に入社した同期生は、45,000円でした。当時の一流企業の半分程度でした。或る日、靴箱に靴を入れながら、「待てよ、22600円というのが、自分に社会が下した価値なんじゃないか」と。若し全日空に入

る力量があれば、倍の給料だ。そうか、これが俺の正当な評価なんだ、と。当時の一軒家の貸家は、月の家賃が4万ほどでした。結婚が予定にあって、その借家に入ることにしていたのですが、給与の倍の家賃です。さあ、どうしたものか？ 当時の受け持ちの生徒の保護者の紹介があった借家だったので、断るわけにも行きません。それで新妻にも応援してもらうことにして、新居に落ち着きました。「よし、お金が足りないなら稼げばよい、幸い学校は夜のバイトを大目というより、勧めている」それで、GDM方式で「塾」をスタートさせたのです。昭和40年代の「小学生に英語」はかなりセンセーショナルだったのでしよう。私の住んでいる街の、商店街の子供たちや、医者の子供たち、わーっと押し寄せてきました。英語の成績がいい＝いい学校に入れる、という図式ができてきた時代でした。大成功で家賃の心配もなく、借家が手狭だということで、教室を併設した自宅まで新築することに。人生の転機になったのが、いわゆる英語教授法への探求の結果というのは、人生の不思議を感じます。

同じく新設普通科で、自身の英語力不足を補って余りある「寺島記号式」との出会いも、なにか運命的なものを感じます。

それではどうして寺島記号式に出会うことができたのか、そのきっかけをお話します。商業科の英語教師としては、楽勝気分で日々の教壇に立っていましたが、いよいよ自分の英語力がためされる土壇場にたつて、「寺島記号式」に出会う前に、SIMという方式に関心と興味をもっていました。その前は中津亮子さんの「中津方式」の研究科会にも所属し、独特の理論を仲間と実践しながら、結構研究熱心だったのかも知れませんが、この研究会は結構身体的負担がキツくて、たとえばアルファベットの練習も、10メートルぐらいの距離をとって、相手に届くように発声するわけです。エイービースイー大声でやるわけですから、ジャージ姿で、ここまでやるの？英米人の発声は、うわ唇が上にめくれているラッパ口型だから等々、どうにもイマイチ馴染めない感じでしたね。あるいはクニヒロ先生の「只管朗読」等々、いろんな、これは良い、という勉強法や、発音方式を学びながら

或る日、SIMに出会ったのです。大学で、英語を専門に勉強していない方が、苦勞の末たどりついた「SIM方式」とうのに惹かれて、ダン・上野さんに直々に会いに行きました。

その時に博多で有名な「鶏卵素麺」というお菓子をお持ちしました。これはお菓子で、素麺ではありません。東京の方が、素麺という名前に「茹でないといけないのか」と茹でたそうです、そんなエピソードがあるお菓子でしたので、その話をダン。上野さんに。

その時に、私は九州は佐賀の出ですから、鶏卵素麺はよく知っています、と大笑いに。それを契機に仲良くしてもらって、テープを購入したりして、勉強を。その折に、同じ志の仲間の紹介等あったのです。その仲間の一人が「どうも上野先生のフレーズの切り方はちょっとおかしい」と言っている大学の先生がいるよ、と耳打ちしてくれたのです。

その大学の先生というのが寺島先生だったのです。先生がお書きになった、論文を読ませてもらいました。どの文章かは、忘れましたが、衝撃でした。理路整然として、矛盾なく、上野理論を木っ端微塵に。まさにガンという衝撃でしたね。

私の人生の信念の一つに「創造者に直接会う」というのがあります。躊躇することなく、寺島先生に会おう、と。岐阜大まで電話をして、快く会って下さるので、急遽岐阜大を訪ねました。あの有名な「柳ヶ瀬ブルース」を思い起こしながら、岐阜大まで先生を訪ねました。

考えてみれば「寺島記号式」に出会うまで、GDM～中津方式～SIM 等の洗礼を受けながらようやく「本物」に出会うことが出来たのです。

今思い起こせば、第二次世界大戦が終戦した時が4歳。宮崎の片田舎に大阪から引き上げて兄弟7人の大家族。配給（この言葉分かりますか？）の豆腐に当たった兄と妹は、赤痢で急逝、同じく僕も食べたはずですが、生き残ったのです。また、長兄の背中におぶわれて、間一髪の焼夷弾の爆撃から逃れて、命拾い。子どもの頃に2度は死んでいるのです。

親父は大変ハイカラな人で、当時既に運転免許証を所持、田舎では貴重な免許ということで兵役を逃れて、大阪時代の「タクシー会社経営」から一転、大衆食堂を開業。食糧事情の悪い時代にこれが大当たり、

昭和35年に高校を出ましたが、その時は大学受験に失敗、結果2年も浪人を。さすがに3年は無理と、2浪して、公立の大学で英語専攻学科に。

話はもとにサカ戻りますが、中学のときに初めて「英語」に出会うのですが、進駐軍のGIたちがジープを疾駆させ、チョコレートやガムを車から投げ捨てて行く光景がよく見られました。そんなこんなで「英語は格好いい」という雰囲気。やはり人間、外見は大事ですね、背は高いわ、目はブルーだわ、顔立ち

はシャープだわ、スタイルはいいわ、一種の憧れがあったのですね。英語を学ぶ、一種のアコガレに。Jack and Betty という教科書でした。なんと単語のスペルを覚えるのに、1000回筆写を、当時を思うと英語の勉強は、手が真っ黒という記憶が。Is are in on I you など1000回筆写を目標に必死でしたね、おかげで今でも数回単語をなぞれば、自分のものに。英語の成績が良い、サーフィンに乗った感じで、当時は珍しかった「英語塾」にも通っていました。この塾の先生が大変難しい話をする先生で「イエスペルセンが言うには・・・」中学生相手に高度なお話でした。実に60年以上も前の話ですが、このイエスペルセンだけは記憶に。今でこそ塾通いは普通ですが、昭和30年代に、宮崎の片田舎で、英語の塾が存在したのです。

お陰で学校の英語の成績は問題なくクラストップでした。当時、いわゆる不良グループがいたのですが、成績のいい生徒には絶対に手を出さないのです。これには助かりましたね。腕力にはもとより自信がないタイプでしたから。そのために勉強に励んでいたようなところもありましたね。

高校進学はなんなく突破して、いよいよ大学です。当時は、大学進学は当たり前という感覚でした、家の商売が順調だったことや、周囲の成績トップクラスは、皆大学進学でしたからね、世間はまだまだ「集団就職」で関西や東京に多くの友人は行きましたが、幸運というか恵まれていた環境でした。大学進学率が14%ぐらいの頃です。

実はこの安易な大学進学の姿勢が、大きくその後の人生を左右してきます。当時の英語塾の先生の息子さんが、大阪大学だったので、安易に自分も、と。結果ひどい目にあって3回連続受験を。見事に玄関払いでした。大阪の予備校に通ったのですが、田舎者の悲しさで、受験の厳しさも全く理解出来ていませんでした。だいたい数学が苦手でしたが、予備校の模試で98点を取ったことがあります。これならまあ2, 3番には行くだろうと、成績発表を掲示板で。なんと98番だったのです。100点が数人、99点が90名以上で、98点は98番目。これほどのショックは初めてでした。田舎の高校では98とれば大体上位の順位です。しかし、現実には厳しい結果でした。1点の怖さをしみじみ思い知らされました。

英語は、当時は旺文社の全国模試だけでしたが、5万人の受験生で7位に。どうもこのあたりが、英語に対して、「根拠のない自信」を増幅させた気がします。阪大は法学部でしたが、結果2浪までして、滑りどめで、北九州市立大学の英

文科を、ここだけが合格で、結局、弁護士志望を諦めて。3教科試験で苦手な「数学」がなかったのです。

しかし、人生はわからないものです。このすべり止めに引っかかったお陰で、就職は、高校英語教師の職を、そして「寺島方式」に巡りあえたのですから。実は、まあ英語とはあまり関係ないのですが、時系列的に文を紡いでいくと、やはり避けて通れないものがあります。浪人2年のおかげで、大学の英語の授業は楽勝な感じでした。なにしろ入学試験で、30分で退出、完全解答し終わって。そして、大学に入って、最初の原書購読の時間のテキストが、予備校で勉強した教材でした。担当教授が「誰か和訳してくれないか」いち早く挙手をして、スラスラと。この教授が、実は後刻、私を指名して、私立高校の講師の仕事を世話してくれたのです。

大学通学当時は麻雀に凝って、「学校の授業はできるだけ出ない」、そして「部活動を優先する」方針で、なんとあの当時、昭和37年、「航空部」に所属して、グライダー飛行に夢中だったのです。月に1週間は、飛行場で合宿訓練、その費用が半端じゃないのです。そのためにアルバイトの連続。授業にでる時間はありません、それで無事に卒業できたのですから、考えてみれば日本の大学というところは不思議なところでした。

「市川君、バイトバイトでお金に苦労しているみたいだな、割のいいバイトがあるから、やってみないか」とあの「原書購読」の教授が、声を掛けてくれたのです。最初の授業でスラスラとやったことが印象にあったのでしょう。当時の時間給は破格で、私立高校の非常勤講師のアルバイトに出会ったのです。まさか、これがその後の人生を大きく展開させるとは、まさに思いもよらないきっかけになったのです。

北九州ではまさに悪名高い男子高校でしたが、土地の者ではありませんから、高校の評判なんて知りません。ただただ時給の良さに惹かれて、承諾しただけです。

今でも覚えています。ある日の授業のことです。授業を全く聞いてない生徒がいました。それだけならまだしも、机の下で、弁当を開いているのです。さすがに頭に血がのぼって、「おい、いい加減にせんか」と机のそばに寄っていきました。素直に「はい、すいません」と言ってくれば、なにごとも起こらなかったでしょう。あろうことか、ニヤツと笑って白目で私を睨みつけたのです。

さすがにカッと来ました。アットというまに教科書で生徒にびんたを。丁寧に往復ビンタを。教室中がシーンとなりました。怒りで身体が震えるは、引越みはつかないわ、生徒は生徒で、イスをダタンと響かして、教室を出ていったのです。

そして数週間後、期末試験でその生徒が、クラス上位の成績を、友達に言っていたそうです「あいつをかならず見返してやる、英語で」と。当時は赤点の生徒が、殴られた恨みを、成績で見返すという心意気も素晴らしいですが、実際に結果を。

割と単純な私は、大感動です。きっかけはどうあれ、一人の生徒の変容に仰天した正直な気持ちは、「一人の生徒の変容を促す」そんな凄いことが、教師にはできるんだ、と。

当時、私は4年生で、ほぼ就職も貿易会社に内定していたのですが、「よし、教師になろう」との気持ちが強く湧いてきて、教員採用試験を受験することになったのです。

ところが、気がついてみると「教員免許」を取得してなかったのです。更に1年間、必要科目の単位取得のために「聴講生」として大学に。都合7年掛かって大学終えたのです。

念願の「高校英語教師」になったのはいいのですが、県立高校の試験には合格していたのですが、採用通知が来る前に、私立の女子高校から誘いがあって、スポーツで有名な高校でした。しかも商業科のみ。就職を決める時は「ああ、女子高だから、暴力事件はないな」と強く思いましたね。大学時代の非常勤講師の時は、男子校で、暴力沙汰がしょっちゅうでしたから。それに転勤もないし。ところが案の定、成績レベルは最悪の状況です。なにしろ、どうにも授業が生徒に届いてないな、と思って、アルファベットのテストを。高校1年でですよ。なんとクラスの3分の1が、アルファベットを満足に書けない—この事実には啞然としました。これでは、生徒は、英語がダメでこの高校に来ている実情がありましたから、テキストを読んで訳して、「授業」に食いつくはずはありあません。

ここから教師の苦悩を体験していくのです。冒頭に述べた GDM との出会いは、まさに早天に慈雨という感じでした。何度も教師をやめよう、この学校を辞めようと苦悩していましたから。しかし、あの成績の悪かった生徒が、見事に蘇

生したではないか、その思いがずっと胸中にありました、なにかきっかけがあれば、必ず生徒は良くなる、と。

そうだ、アルファベットが書けない、これは生徒が高校生だから、という前提があるので「失望」につながる、初めて英語に触れる生徒なら、「3分の1も、書けるのか、」という希望に繋がる、そう思い直したのです。そこで出会ったのが「DGM」だったのです。

しかし、その方式もなかなか高校では限界があります。人称代名詞や、時制に関しては大変効果がありましたが、語彙の問題も含めて、正規のテキストの内容は、高校生向きで、ダイレクトに行きません。そうして悩む内に、教授法への開眼は、また別の方向に向かったのです。当時「中津 遼子」さんというユニークな英語本を書いた先生がいました。北九州に「中津英語研究会」が発足し、さっそく訪ねてみました、ご本人には会えなかったのですが、高校教師が数名集まっていました。週一の研修会ということで、その会に所属したのですが、研修会当日はジャージで、体操できる服装をとということで、エッとびっくり。発声練習が凄いです。10メートル間隔で、対面して、アルファベットを叫ぶのです。腹の底にズシンと響く音声を、という目的で。確かにカキクケコと ka , ki ku ke ko

はその発声が違うということはしっかり理解できました。或いは、発声はラップ口型でなければいけない、等しい勉強になったのですが、学校の授業展開には、あまり効力を感じることもない実態で、いつのまにか研修会に出ていくこともなくなりました。しかし、通用する英語とは、どんなものか、おぼろげに分かったような気がしました。

そんな自分なりの紆余曲折を繰り返しながら、ダン・上野さんの「SIM」に出会ったのです。東京は成城というところに、会社ビルがありましたので、手土産を持って訪問。気持ちよく面談を承知していただいて。同じ九州出身ということで、お話が弾み、テープや教材も購入しました。実際、録音を途中で切る録音装置等の工場も見せて貰ったり、いい勉強になりました。当時旺文社の「英語検定」の試験官をしていましたので、その英検面接委員という肩書で、新聞の全面広告にコメントを寄せたりしました。一時期大変評判が良かったようです。

実はこの SIM との交流が、寺島先生との出会いになったのです。この SIM のメンバーの一人が、「先生、この SIM 方式のフレーズの切り方はおかしい」と批判している文書を手に入れたので、送ります、と。その書き手が、岐阜大学寺島教授だったのです、その論文を一読して、なにか胸の悶えがスット取れたような

感じを持ちました。理路整然として、説得のある論文でした。ダン先生は「私は英語の素人」がウリでしたから、寺島教授の「国立大学教授」というステータスが、効果的だったのかも知れません。

早速、行動です。公費出張は来ませんので、勉強の為ということで、特別休暇扱いだけを学校にお願いしました。すんなり了承を頂いて、岐阜大に飛びました。先生も快く面談を了承していただいて、教授に研究室を訪ねました。この面談が、実にその後の「英語教師人生」を大きく変えるきっかけになったのです。

寺島先生の著作を、まさに貪るように読みました。初めて「英語を楽しみ」心境を味わうことを体験しました。いつのまにか九大の入試もおおかた解けるまでに、センターテストはほぼ満点にまで。これで生徒への自信が付きました。これは実に大きい効果です。教壇に立って、いかなる質問も解答可能（その場で分からないことはあっても、後刻確実に解答できるという自信）という状況ほど、教師に自信をみなぎらせてくれることはありません。どうしても不明な時は、寺島先生に、聞けばいい、と。最後の解決の場もありました。自分でも驚くほどの自信は、自然に授業の態度にも出ますし、普通科の生徒は、いちはやく見抜きます。お陰で、高校普通科と提携していた「代々木ゼミナール」で、勉強も兼ねて夜間部のグリーンコースの非常勤講師も兼ねていたのですが、6年間継続をしました、ここの予備校は「教師・授業評価」が厳しくて、生徒のアンケート判定が毎回繰り返し実施されます。32項目の評価項目があって、授業が終わるたびに、職員が教室で、そのアンケートを実施するのです。評価Aになれば次年度の時間給は倍額、Bで、前年並という厳しさです。有名高校在勤の途中採用組が2年継続すればいいほうです。それほど厳しいのです。そこで6年間も継続できたのは、すべて「寺島記号式」のおかげでした。テキストの英文を徹底して「構造分析」して自分の身に取り込み、生徒に説明する時は、一点の曇りもありません。寺島記号式を知らなかったら、代々木講師の口も、半年も持たなかったでしょう。授業がちょっとでも生徒に認められない時は、次の授業の時は、生徒の出席は半減するのですから。ここが通常の学校とは違います。授業が分からなくても、学校では席に生徒がいます、しかし、予備校は、居なくなるのです。こんな恐ろしい教室はありません。進学有名高校から来た、それなりに評判のいい先生達が、1, 2年で消えていくのは、そんな厳しさに耐えることができないのです。

そのような厳しい授業を要求される場でも、「寺島記号式」で教材を予習し、準

備している僕にとっては「楽しい授業」が展開出来ました。なにしろその日に授業する英文は、すべて頭に入っているし、次の授業をのつながりもしっかり頭に入っていますから。全国で代々木はたしか27校ほどありましたが、英語科だけで1000人近い先生が。アンケートの結果は、当然順位が数値化されます、一番いい時で7番でした。

さて、高校の授業ですが、一度寺島先生を学校に呼んで「公開授業」を実施しました。私が模範授業を実施して、教員に公開、あとで寺島先生の「講評」および「モデル授業」を。その当時の生徒で、現在アメリカの大学院で研究員生活に入っている子もいます。九州では比較的早く「寺島記号式」を取り入れて、先生に福岡まで足を運んでいただき、大きな足跡を残してもらいました。英語科の教員に寺島先生の講演も聞いて頂き、大きな感銘を受けたようです。2, 3記号研の勉強がしたいと若手の先生が、たしか翻訳の加勢までさせていただきました。

私自身の「英語教師」の足跡は、寺島記号式抜きには語れません。高校教師時代にこういうこともありました。家内を亡くしてから、近所の同僚が大変心配をしてくれて、なにしろ7LDKの一軒家に住んでいるので、なんかあつては行けないと、毎朝、迎えに来てくれるのです。それも交通渋滞を避けて朝早く、学校に着くのが毎朝7時前です。職員朝礼が8時半ですから、それまでの時間つぶしに、校庭の花に水をやったり、いろいろしましたが、「そうだ、英語の無料補習」をしようと、「記号式英語無料補習」ということで生徒に告知しました。朝7時半スタートで、最小は10名程度でしたが教材の「魔法の英語」

(寺島 隆吉・寺島 美紀子編)が、大変よく出来た教材で、しかも高校一年レベルでしたから、生徒の口コミで30名を超えるようになりました。副題に「ふしぎなくらいに英語がわかる練習帳」とついているように。生徒がグングンとのめり込んできました。完全に正規の教科書に無関係で純粋に「寺島式英語」の授業ですから、こっちも大変面白く正規の教科書に出て来る英文等も、時には参照しながらの「特別補習」でした。このメンバーは、当時受験を控えた3年生でしたが、構造分析を駆使しながら、入試レベルの英文の解説も入れたり、いろいろ工夫をしました。国立有名大学の合格者も輩出、大変に反響を呼んだ「無料補習」でした。しかし、学校というのはおかしなところで、有料補習も会っているのに、無料はおかしい、とものともらしい反対意見等が出て、担任によっては、出席禁止なんていうアホなことをいう教師もありました。しかし、生徒が喜んで出席するのですから、苦情は無視して継続。学内的に、私が主催しているのでそう表立って反対出来ないという面もありました。30代

の頃に学校に半旗を翻して「組合結成」（当時は私立では組合のない学校が多くありました）した実績が思わぬところでいい影響を。3年間継続してそれなりの実績をあげ、校務の多忙差も加わって、中止しましたが、その時に得た自信が大きかったです。英語の苦手な子も、得意な子にも「記号式英語」の教え方は通用する、ということがはっきりしました。この「寺島記号式英語」は、英語を学びたい、英語に強くなりしたい、そんな思いを持つ生徒なら、だれにでも通用する、この自信は、後日、ある機会にも証明されました。

ある先生が、知人から「英語の嫌いなうちの子と、その友達の二人をめんどうみしてくれる英語の家庭教師はいないか」と尋ねられて、たまたま記号式と一緒に勉強していた、その先生が私に相談してきました。土曜の午後ならなんとか時間取れるから、引き受けよう、ただし3ヶ月は月謝不要。本人達が続ける意志と、成績が上昇したら、4ヶ月目に、月1万円の月謝を頂きます、と。或る日のことです、お母さんが、「この子がこんなに一生懸命に勉強している姿を初めて見ました」と。最初は「魔法の英語」を徹底して教えて、並行して学校の教科書の英文の記号づけをして、教えました。2人の男の子でしたが、学校では4、5時間かかる進度が、1時間で終わるのをみてびっくり、余裕の予習ができるようになったおかげで、学校の授業が楽しみになったみたいでした。授業中は頭を下げていた時間が、堂々といつ指名されても、いい、という自信に変わったみたいで、1年後には偏差値で10以上の上昇ぶりで、無事に家庭教師も終了しました。「先生、このセンマルセンって面白い、文法用語なんか余計なものもいらないし、英文をそのまま意味が取れていって、楽しい」との感想でした。

公的な学校現場でも、私的な家庭教師の場面でも、この「寺島記号式」は、私が英語教師として寄って立つ大いなる支柱でした。寺島先生ご夫妻の知己を得て、まさに不肖の教え子ですが、これまでいろいろお電話等で大変迷惑をかけていますが、気持よく相手して頂き感謝に耐えません。

中学時代に、ただなんとなく憧れていた英語の世界に、教職という仕事を選択して、教科免許「英語」で、職業的的人生を選択しましたが、寺島先生の知遇をえなければ、途中で英語教師を挫折していたかも知れません。「教壇に自信と歓喜をもって立つ」後半生の人生はまさに喜びの日々でした。

「私と英語」の小論文も、やや結論じみて来ましたが、とりあえず400字詰

め原稿用紙50枚をメドに書いてみましたが、時系列で言えば、5年間に渡る、年間2, 3ヶ月の海外引率の仕事等、まだまだいくらでもありますし、海外と
言えば30歳で初めてアメリカに、UCLAでの語学研修(1ドル=360円時代)
の思いで等、まだまだ書くことはたくさんあります。

ともあれ、英語教師として悔いなく後半生を過ごした原動力は、ひとえに「寺
島方式」にあります。英語の授業に悩む全国の英語教師に「ここに凄い道」が
あるよ、何らかの機会にそう言えるチャンスを持ち続けたい、その思いだけ
です。この小論文(論文とはいえませんが)を曲がりなりにも書いてみて、いま
さらながら大きな影響を受けていることを再確認しました。

先生へ 2013年9月26日

ともかく今日送信しようと、大急ぎで書きました。またお電話します、端折り
等多くて意味不明なところも多いと想います。ご容赦下さい。

市川 忠行